

保育・学校・教育施設等での 子どもの水辺の活動・安全教育に関する報告

海と日本プロジェクト2022



一般社団法人

吉川慎之介記念基金

Shinnosuke Memorial Foundation



西条市民活動団体 Love&Safetyさいじょう

2023年3月

2022

2022年、スポーツ庁では、
「令和の日本型学校体育構築支援事業－学校における水難事故防止対策強化－」として、水泳授業の充実を図るために、水辺の安全教育プログラムのモデル事業がスタート。

予期せぬ落水時などの対策としての着衣泳に加えて、水辺での活動中の水難事故防止対策として、ライフジャケットの着用に関する教育の必要性が高まっています。

本調査では、全国各地域で個人・団体・企業などが、地域や保育・教育機関と連携して実施している水辺の活動と安全教育の実践事例について報告します。

2022

1. 宮城県仙台市、石巻市、大崎市
2. 群馬県伊勢崎市
3. 東京都町田市
4. 東京都清瀬市
5. 神奈川県川崎市
6. 神奈川県藤沢市
7. 静岡県浜松市
8. 岐阜県中津川市
9. 愛知県一宮市
10. 広島県福山市
11. 愛媛県西条市
12. 長崎県全域
13. スポーツ庁 水辺の安全教育モデル事業の状況
14. 子どもの水辺の活動と安全教育の未来

1. 宮城県仙台市、石巻市、大崎市他一①

「ういてまで」（着衣泳）教室 一般社団法人水難学会 安倍志摩子先生

宮城県内で「ういてまで」教室を小学校で実施している水難学会の指導員安倍志摩子先生。7月に入ると夏休みまではほぼ毎日、約16校の小学校で「ういてまで」教室を実施。教員向け研修会も実施している。



2022年7月4日
大崎市立古川第四小学校
教員向け研修



2022年7月5日
美里町立小牛田小学校



1. 宮城県仙台市、石巻市、大崎市他一②

「ういてまで」（着衣泳）教室 一般社団法人水難学会 安倍志摩子先生

毎年、年度末までには次年度の教室スケジュールが埋まってしまう。指導者一人対応のため、実施できる学校は限られるものの、学校と教員との信頼関係ができてきている状況。

子どもたちからは「しまちゃん先生」と慕われていた。

ライフジャケットの着用啓発については、制作に協力した絵本、

「かっぱのふうちゃん ライフジャケットでスイスイ」

（<https://youtu.be/DgFtyfE1-mA>）を各学校へ寄贈。

水難学会では、ライフジャケット（救命胴衣）や緊急浮き具などを活用した安全教育プログラム「シン・ういてまで」が考案されている。



「ういてまで」のプログラムに沿って、子どもたちの誘導など、学校の先生との協働で教室が実施されている。

今後の目標・課題

- ・ 地域、学校での指導者育成
- ・ 先生方自身にも水難防止の理解が必要
- ・ 学校での水辺の安全教育の継続など

2. 群馬県伊勢崎市一①

2022年度 群馬県小学校 「背浮き・ライフジャケット」プログラム 東京海洋大学 田村祐司先生

伊勢崎市立三郷小学校 7月12.13.14日：3日間、3、4、5、6年生、15クラス、455名に指導（水難学会指導員4名）



三郷小学校周辺の水辺の確認



ライジャケサンタの「水辺の安全教室」



「背浮き」のポイント



陸上者（バイスタンダー）がとるべき救助対応



➤ 事前授業（水辺安全映像視聴） https://youtu.be/z_zNvR1lf24

◎ 各クラスで、プール授業前までに視聴

1. 三郷小学校近くの水辺の確認（地図）
2. 水辺活動時のライフジャケット装着の意義

※ライフジャケット装着と生存率（統計）

3. ライフジャケットの装着方法
4. ライフジャケットが無い場合の対応

- 1) 「背浮き」のポイント
- 2) 陸上の救助者 身の周りの浮力体投入、119番通報
- 3) 身の周りの浮力体の紹介



➤ プール水泳授業（45分）

1. プールサイドで、実技解説

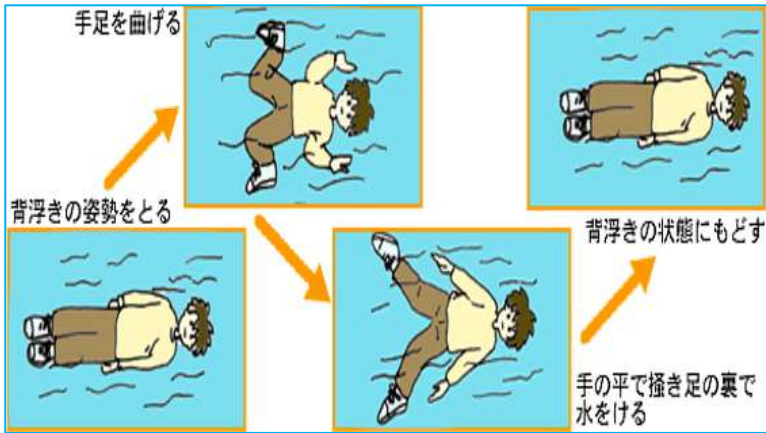
- 1) ライフジャケット装着での生還事例の紹介
※2021年11月、瀬戸内海・香川県小学校修学旅行・船舶座礁事故
- 2) ライフジャケットの装着方法実演
- 3) ライフジャケット装着時の浮き方・移動の実演
- 4) 「背浮き」の浮き方と移動の実演
- 5) 陸上者の救助実演：身の周りの浮力体の投入・119番通報

2. 背浮きとライフジャケットプログラムの実践

2. 群馬県伊勢崎市②

2022年度 群馬県小学校「背浮き・ライフジャケット」プログラム 東京海洋大学 田村祐司先生

エレメンタリーバックストローク



背浮き姿勢でのグループハドル
「フラワー(花)体型」

HELP姿勢 (熱損失低減姿勢・耐放熱(保熱)姿勢) Heat Escape Lessening Posture



グループハドル

HELP姿勢でのグループハドルの目的

- 1)ヘリからの発見がし易い体形
1人の漂流者(点)
→複数(面)へ!
- 2)体温共有、低体温症予防
- 3)お互いの励まし
→生存への気力・勇気
- 4)体力低下や傷病者を真ん中に配置
- 5)360度監視
→全員がすべて別方向を見ている

➤ ライフジャケット・プール実技プログラム

1. ライフジャケット装着方法の確認(ライフジャケットが脱げない装着)
2. プールサイドの横を歩く(水害時等の移動しやすい歩き方の確認)
→半分まではまっすぐ歩行、後半は横歩きや後ろ歩き
3. 自由に背浮きで浮く
→手足を動かして移動と回転、エレメンタリーバックストロークの実演と練習
4. クロールや平泳ぎで泳いだ後に、エレメンタリーバックストロークで自由に移動
 - 1)エレメンタリーバックストロークの方が、楽に移動できる事を体感
 - 2)船の沈没時は、速く船から離れるために、クロール泳で移動することが必要だということを伝え、実践させる

5. 漂流時に救助を待つ「ヘルプ姿勢」と「グループハドル」の実践

1)「ヘルプ姿勢」

→漂流時の低体温予防のため、膝・肘・腰を曲げる

2)「グループハドル」

・離散した児童を指導員の所へ集合

→体温共有で温かさを体感

・漂流者の離散予防→隣の者との手と腕の握り方の体験

6. 複数の児童で「フラワー(花形)体型」を形成

1)脚を円の中心に伸ばし、手をつなぐ

2)ゲーム性により児童の興味が高まり、サバイバル時の一体感と協調性を確認する。

3. 東京都一① 町田市

「ハッピードリーム リバーキャンプ」 社会福祉法人 龍美 ハッピードリーム鶴間 園長 土橋一智先生



2022年は、新型コロナウイルスの影響で2年ぶりの実施となった。長年、実施してきた場所が、台風の影響で川の地形が変わってしまい、子どもたちの川遊びには向かないと判断。下見の結果、初めて利用することになった秋川（多摩川水系）のキャンプ場を選定。

場所：緑の休暇村フォレストイングコテージ（東京都檜原村）貸切で他の利用客無し。

参加者：年長（5~6歳）園児約24名、引率保育士7名。ライフジャケットは園で管理している。（子ども用30着、大人用6着）



子どもの学びと育ちを両立している「リバーキャンプ」は、恒例行事として、安全に楽しむためのブラッシュアップを重ねてきた。現在では、保育現場にICTが導入され、アプリやSNSなどを活用し、お泊り保育の様子など、現地から保護者に共有している。日常の保育実践の繋がりの中にリバーキャンプがあり、知識や情報をベースとした信頼関係の築きのもと、リバーキャンプは実現している。職員、保護者、子どもたちとの良好なコミュニケーションは全ての安全に通じる。



子どもたちにとって、お泊り保育は初めての体験の連続で、保護者も不安や心配はある。キャンプの前に、プールでライフジャケットの着用体験を実施。ライフジャケットに付いている笛は「助けを求めるためのもの！」というルールを教えて、プール活動では思い切り吹かせることで子どもの「吹いてみたい」関心に応えつつ、水辺の活動イメージを膨らませ、当日のキャンプを迎える。保護者の事前説明会では、下見の際に撮影した動画や写真などで、理解を深めてもらう。

3. 東京都一②

「子どもの安全推進運動」一般社団法人東京都民間保育園協会（会員施設数：約1200園）

機関誌 6月号

東京都民間保育園協会より、子どもの安全推進運動



子どもたちにライフジャケを！ vol.1

「楽しかったね！」初夢も楽しくハッピーエンドな思い出にするために～安全なだけじゃなく、着て楽しいライフジャケット着用のススメ

またも暑く初夏のこの時期、海や川、キャンプなどで、水辺遊びが盛んになる季節です。夏は、多くが夜に家族と寄り添う子どもの水辺の事故が多くなる季節でもあります。東京都民間保育園協会では、子どもたちの命と安全を守るため、そして楽しい思い出が子どもたちの成長の大きな糧になるように、園内の活動はもちろん、家庭でのお出かけ時の子どもたちの安全対策の大切さを伝えていくために「ライフジャケット着用推進運動」を進めています。

ライフジャケットを着用して遊ばせたい場合、その4割以上が命を失っています。一方、ライフジャケットを着用していた場合は事故が減少しています。園外活動時で水辺に行く際はもちろん、保育園に送迎する際でもライフジャケットの着用をすすめていくことが、間違いなく子どもの命を救うこととなります。各会員園でも保護者とこの大切さを共有し、保護者の皆さんへも啓蒙活動をお願いします。



水辺では不安定な流れ、想定外で大きな波に襲われます。そして、その被害に巻き込まれたらこういふ言葉が聞かれます。「ほんのちょっと目を離しただけでいいのー」「離れているよーは見えないわー」「毎年やっていること、今まで事故なんてなかったのー」「子どもも昔から泳ぎから大丈夫だと思ってたー」「こんな事故なんて思っていなかったーなんですもの子ー」「ライフジャケットを着てしまえばいいわー」

私たち保育園は子どもの心身の育ちと安全を守る大事な存在。園でも家庭でも、水辺では【子どもも大人もライフジャケを！】

ライフジャケット着用で安全対策をしている園の取り組み事例

※事例はあくまで一例であり、園によって異なる場合があります。

事例1：園内での水辺遊びに必ず着用を促す
園内のプールや水辺遊びでは、子どもたちが遊ぶ際に必ずライフジャケットを着用することを徹底しています。また、園外活動時でも水辺に行く際は必ず着用を促しています。

事例2：保護者向けにライフジャケットを貸出する
園内にライフジャケットを貸出するコーナーを設置し、保護者が子どもを連れてくる際に自由に借りることができます。また、園外活動時でもライフジャケットを貸出しています。

事例3：園児へのライフジャケットの着用を促す
園児へのライフジャケットの着用を促すために、園内にライフジャケットを着用している園児の写真を掲示し、子どもたちに着用を促しています。

事例4：園外活動時のライフジャケットの着用を促す
園外活動時でも水辺に行く際は必ずライフジャケットを着用を促しています。また、園外活動時でもライフジャケットを着用している園児の写真を掲示し、子どもたちに着用を促しています。

ライフジャケットを着用することで、ダイナミックに自然と向き合える楽しみながら楽しく遊んでいます。

園で用意、紹介する際にオススメのライフジャケット

ライフジャケットにはいくつかの種類があります。年齢に応じた適切な種類の「型」や「色」や「素材」が重要です。また、安全が第一のもので、子どもが着用しやすい「型」や「色」や「素材」が重要です。また、子どもが着用しやすい「型」や「色」や「素材」が重要です。

※事例はあくまで一例であり、園によって異なる場合があります。

「保護者向けにライフジャケットを貸出している事例」
園内にライフジャケットを貸出するコーナーを設置し、保護者が子どもを連れてくる際に自由に借りることができます。また、園外活動時でもライフジャケットを貸出しています。

※事例はあくまで一例であり、園によって異なる場合があります。

次号 vol.2 では、水辺の安全に関するさまざまな取り組みなどの情報をお届けいたします。

水難事故防止啓発ポスター

東京みんぱきょうの【子どもの命を守る運動】

子どもたちにライフジャケを！

水辺では必ずライフジャケットを着用しよう

水辺で遊ぶことが多くなる季節。子どもの重大水難事故も多くなります。ちょっとした注目で子どもの命が失われないために、「楽しかったね！」と、素敵な思い出を残すために、ライフジャケットの着用を「アタリマエ」に。

少しだけ目を離した一瞬がつかれたら見えなくなって！
多くが重大事故になる水辺でのちょっとした油断。
溺死事故の多くはライフジャケットの着用で防ぐことができます。
水辺に遊びに行くときには必ず子どもも大人もライフジャケットの着用を！

一般社団法人 東京都民間保育園協会

保護者向けライフジャケット貸出



機関誌で紹介した保育園でのライフジャケットの貸出。保護者向けに、自由に貸出をしている。多くの保護者が利用。子どもの成長にあわせて購入するのは買い替えなどの負担もあるため、貸出は有益な育児サポートであり、水辺の安全を伝える取組にもなっている。この取組に関心を持ってくれた保育園から問い合わせもあり、他の地域・施設に広がる事を期待する。

東京都民間保育園協会は会員施設数約1200園の団体。2022年は機関誌6月、7月号で、「子どもの安全推進運動」の一環として、水難事故防止の特集を展開。啓発ポスターも制作し、各施設に配布・掲出。2023年度も活動の継続が決まった。川や海で水辺の活動を実施する保育園は少ないものの、園からの保護者への事故防止啓発に重要な情報共有となっている。

保育園でのプール活動に関する安全については、監視など保育業務支援の人員確保に向けた国の補助制度なども始まっている。

5. 東京都清瀬市ー①

「～未来を支える子どもたちへ～身近な河川で学ぶ楽しい自然環境校外学習」 グローブライド株式会社
清瀬市立清明小学校 6年生 2022年5月26日



自然環境校外学習：柳瀬川

GLOBERIDE

<https://www.globeride.co.jp/>

- ・ 校外学習後、座学での振り返り授業
- ・ 教職員への指導講習も実施

今回、取組2年目の自然体験学習には、保護者も参加。学校を中心に地域・流域の特性に合った水辺の自然・環境学習が根ざし始めている。



取組のきっかけは、清瀬市で開催された柳瀬川の川祭り。地元NPOを仲介して清明小学校校長との出会いがあり、小学校での自然環境校外学習が実現。最初の校外学習後、子どもたちの成長や関心度の高さ、楽しく学びを深めていく姿勢に、学校の先生をはじめ関係者一同、教室の学習だけでは得ることのできない校外学習の重要性に気づかされた。今後、4・5年生の校外学習を継続的に実施する計画（予定）。

5. 東京都清瀬市一②

「～未来を支える子どもたちへ～身近な河川で学ぶ楽しい自然環境校外学習」 グローブライド株式会社
清瀬市立清明小学校 6年生 2022年5月26日 柳瀬川



周辺の生き物も観察

生物だけではなく現状の環境を
学んで頂く為にゴミ拾いも実施

川の生物の観察

安全の教育 救命具装着方法

すでに前年（4年生の時）に自然環境校外学習を体験した5年生は、自主的に自ら学ぶべき主
テーマを考え校外学習を計画している。今後、清明小学校では、上級生の自然体験（この活
動）から学ぶ下級生の子どもたちの姿も見られるかもしれない。

自然を学ぶことで関心を高め環境を守る取組、活動へと繋げる持続可能な教育支援を目指す。

補足情報：7月に学校プールでライフジャケットを活用した着衣泳



清明小学校ホームページより

<https://www.kiyose.ed.jp/seimeisyougakkou/yousu/2004300/2004304.html>

5. 神奈川県川崎市一①

「多摩川ガサガサ探検隊」 中本賢先生

神奈川県川崎市立南菅小学校 5年生 2022年6月16日、17日



多摩川支流三沢川「ガサガサ探検隊」

ライフジャケットは、川崎市教育委員会が2011年に200着購入水辺の教育活動の安全確保のため、備品として管理している。

(2019年5月8日付：神奈川新聞記事)

1日目：事前授業として多摩川の歴史や環境について学ぶ。子どもたちは賢さんの楽しい講義に集中。

2日目：三沢川で「ガサガサ探検隊」生徒の保護者も参加。

5. 神奈川県川崎市一②

「多摩川ガサガサ探検隊」 中本賢先生



「川は危険だから近寄らない」という注意喚起だけでは、何がどうして危険なのかを知る機会が失われてしまう。水難事故などから命を守る訓練も必要だが、都会の住宅街を流れる身近な川を知る体験学習は、地域の自然との関わり方を学ぶことであり、楽しく夢中になれる時間、学びと遊び・体験・探検の機会も、命を育む重要な教育といえる。

過去のガサガサ探検隊に関する情報 第403号 多摩川クラブトピックス 中本賢
<http://gasagasa.la.coocan.jp/topics/topic-403/403topic.html>

【参考情報】

川崎市環境総合研究所では環境学習用教材として、ライフジャケットを貸し出している。
<https://www.city.kawasaki.jp/300/page/0000112425.html>

6. 神奈川県藤沢市一①

「ジュニアライフセービング教室」 特定非営利活動法人西浜サーフライフセービングクラブ 風間隆宏先生



2007年8月4日藤沢市引地川河口で市内在住の中学生2名の溺水事故が発生。地域に大きな衝撃を与えた。翌年2008年から、藤沢市内の小中学校で水辺の安全に関する講演をスタート。2009年から「ジュニアライフセービング教室」を藤沢市の市民活動団体提案協働事業として18校で実施。当時、学校での水難事故防止学習等の実施は、西浜サーフライフセービングクラブや日本ライフセービング協会としても事例少なく、地域に身近な海や川の特徴と遊泳禁止区域や海水浴場などの内容を、学校の先生方の意見も頂き、信頼関係を築きながらプログラムを構築していった。

西浜サーフライフセービングクラブには、日本ライフセービング協会指導員が約20名所属し、交代で講習を行い、教員を目指す学生などもサポートに入る。

2008年から毎年実施し、事故から15年を迎えた2022年、藤沢市教育委員会と協働で小中学校併せて23校で開催。自治体として先駆的な水辺の安全教育となっている。

小中学校合計：23校 3,276人

- 中学校：6校（8回） 1,591人
- 小学校：17校（20回） 1,685人

6. 神奈川県藤沢市一②

「ジュニアライフセービング教室」 特定非営利活動法人西浜サーフライフセービングクラブ 風間隆宏先生

【講演形式】



【プール実技】



【講演形式】

(復習にはe-lifesavingを活用)

1. ライフセーバーとは？
2. 藤沢の海水浴場がどこにあるのか？
3. 海について知ろう！
4. 自分の身を守るには？
5. 仲間の命を守るには？

【プール実技】

1. 水への安全な入り方
2. 着衣を着て歩く・泳ぐ(平泳ぎ・クロール)・安全な移動方法(ライフセービング・バックストローク)
3. 水に落ちた際の浮き身体験(何ものなし、ビート版、ペットボトル)
4. 救助方法体験(声をかける、浮くものを投げる)
5. チューブレスキューデモンストレーション

今後の目標・課題

- 平日の講師、指導者の確保
- 講師・指導者の養成
- 持続可能な仕組みにするための全国様々な活動事例の共有

授業を受けた子どもたちが海水浴場へ遊びに来ると、ライフセーバーに気さくに声をかけてくる光景がみられるようになった。14年継続していると、当時、教育委員会で一緒に事業策定して頂いた先生方が校長先生となって学校で教室を実施して下さったり、授業を受けてくれた子どもが教育者として地域へ戻ってきてくれる状況変化もある。

「ジュニアライフセービング教室」は、水難事故防止と地元の海の魅力を次世代へ繋げていくために大切な取組として地域に根ざしている。

7. 静岡県浜松市一①

「ういてまで出前講座」 静岡県立三ヶ日青年の家

前三ヶ日青年の家所長 (有)ShipMan 代表 城田 守先生



一般社団法人水難学会の指導員資格を取得している職員が出前授業を実施している。

ういてまでプログラムに沿って、ライフジャケットも活用し、着用の仕方や背浮きなどを指導。理解ある校長先生のいる学校での実施にとどまっている。

静岡県教育委員会からの委託で
学校向けライフジャケットレンタル事業を開始

今後の目標・課題

- ・ 指導員の養成
- ・ 県内、市内全校での安全教育実施

7. 静岡県浜松市一②

「カッターボート実習」静岡県立三ヶ日青年の家 前三ヶ日青年の家所長 (有)ShipMan 代表 城田 守先生

カッターボート実習での安全指導

落水（ライフジャケットの着用方法、ういてまての指導徹底）
熱中症（休憩時間の確保、水分補給）
櫂（オール）の接触（櫂の扱い方法の指導徹底）
自然災害（気象情報、緊急避難場所の把握）



実施時期：3月中旬～10月対象年齢：小学5年生以上



浜名湖海洋少年団結団式

主催 浜名湖海洋少年団 共催 日本海地少年団連盟

2022年10月発足
2023年1月 浜名湖海洋少年団結団式

小学校4年生～高校生が水辺の安全啓発活動・マリン体験格差解消活動に取り組む。
西野花菜さんのお父様西野友章さんも発起人に。



教訓を未来へつなぐ

菜の花キャンドル
2022年12月



「菜の花キャンドル」は、2010年、三ヶ日青年の家で発生したボート転覆事故で亡くなった西野花菜さんに思いを馳せ、毎年開催している。子どもたちの安全への願いが込められている大切な取組。
地域の小学生、高校生も参加。

8. 岐阜県中津川市

「地域河川を利用した水難事故防止学習」

岐阜聖徳学園大学 稲垣良介先生

付知川 中津川市立付知中学校 1年生

写真：岐阜聖徳学園大学サイトより<http://www.shotoku.ac.jp/information/2022/07/122001nhk-7.php>



2013年からスタートした水難事故防止学習は10年目を迎えた。現在では、付知中学校と中津川市北消防署が共同で、付知川で水難事故防止学習を実施。岐阜聖徳学園大学の教育学部の学生も指導補助として参加。川での実習後、可能な範囲で事後指導を行うこともある。事後指導は生徒にとって有益な効果が確認できているため、なるべく実施の方向で調整をしている。

体育の水泳授業の一環として実施されているこの学習は、稲垣先生が福井大学に在籍中に「教育現場と大学の共同による「地域河川を利用した水難事故防止学習」の授業計画作成過程」の研究から始まった。現在では、研究の域を超え、学習が地域に根ざしている。自然に恵まれた地域で、日本を代表する清流付知川が身近にある子どもたちと地域社会にとって、この学習の位置づけは有益な学びの機会となっている。

今後の目標・課題

学習を実践できる地域社会、文化を継承していくこと

参考文献

実践論文「教育現場と大学の共同による「地域河川を利用した水難事故防止学習」の授業計画作成過程」
<https://core.ac.uk/download/pdf/59042626.pdf>

9. 愛知県一宮市

「小学校での水難事故防止学習」 岐阜聖徳学園大学 稲垣良介先生

一宮市立葉栗小学校 4年生～6年生

一宮市立葉栗小学校ウェブサイト <https://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310133&no=42>



今年度2年目。小学4年生～6年生を対象に水難事故防止学習を実施。指導補助として岐阜聖徳学園大学教育学部の学生5名ほど参加。子どもたちが着用しているライフジャケットは、岐阜聖徳学園大学で管理しているもの（約100着）。外部講師が入ることで、子どもたちはもちろんのこと、学校職員の方や学校に予算面も含め負担にならない提案が重要。

今後の目標・課題

- ・教職課程での指導者の養成
- ・消防など公的機関との協働
- ・学校・生徒（学年）にあった水辺の安全教育プログラムの構築
- ・ライフジャケットの管理

稲垣先生の取組として、他地域の学校などから依頼があった場合、単発での出前授業を実施している。

学校での体育教育と安全教育は、子どもの心身の成長に不可欠なものとして、家庭環境等に左右されることなく、体験活動の機会を創出できる環境を整備していくことを目指す。

10. 広島県福山市一①

「水辺の安全教室と救命講習」市民団体「ボウサイズ」代表 救急救命士 大原知（さとる）先生



2019年から福山市で市民団体「ボウサイズ」を起ち上げ、市内の保育所や小学校で、水辺の安全教室の出前授業を実施。
2022年は、福山市教育委員会から市内の学校へ周知してもらい、小学校10校、保育所1施設で着衣泳とライフジャケットを活用した水辺の安全教育プログラムを展開。救命講習も実施している。出前授業の実施は、各学校の校長、園長の判断による。
2021年に、ライフジャケット32着を福山市教育委員会に寄贈。学校教育での活用を促す。

10. 広島県福山市一②

「産学連携事業 ライフジャケット着用啓発」市民団体「ボウサイズ」代表 救急救命士 大原知（さとる）先生



穴吹ビジネス専門学校福山校のCG・WEBデザイン学科、グラフィックデザイン学科との産学連携事業として、水難事故防止とライフジャケット着用啓発ポスターを制作。福山市教育委員会でポスターが採用され、各学校に掲出。ライフジャケットの認知と学校での水辺の安全教育を広げるためには、地域での様々な連携は不可欠。

- 今後の目標・課題**
- ・ 指導者、人材の確保
 - ・ ライフジャケットを地域に広げるために協賛企業など協力者を増やす

11. 愛媛県西条市一①

「さいじょう子どもの水辺安全セミナー：加茂川MAP」 cross point代表 久保一平先生



2012年7月20日、当時、石鎚ふれあいの里スタッフだった久保先生は、市内幼稚園のお泊り保育で訪れていた園児が増水した加茂川に流され死亡した事故で救助活動に関わった。その後も加茂川では10代の子どもが亡くなる事故が相次いだ。地域の人にとって大切な加茂川で、水難事故を繰り返さないために、2021年、加茂川の安全マップを制作。市民活動団体Love&Safetyさいじょうの活動にも参画し、市内の全小中学校と地域で加茂川MAPを配布した。加茂川MAPは、子どもたちと地域の人々とのコミュニケーションツールにもなっている。学校での「地元密着型水難事故防止教室」の出前教室にも尽力している。加茂川MAP同様に、オリジナル教材を制作し、事前学習とプールでの体験学習を実施。加茂川での川遊び体験やライフジャケットのレンタルサービスも提供している。

11. 愛媛県西条市一②

「さいじょう子どもの水辺安全セミナー」 cross point代表 久保一平先生



事前学習
↓
プール体験学習



2022年、教育委員会を通じてセミナー告知を行い、小学校5年生・6年生を対象に、市内小学校6校、親子活動として1校、保育園1園で実施。実施は校長、園長の判断による。保育園については、西条市子ども安全管理士講座を受講した保育園園長から依頼があった。学びと活動を礎としたサイクルが醸成されつつある。親子教室は、保護者も共に学び合うことで、地元の加茂川との関わり方や遊び方がよりよい方向へ進むことが確認できた。生活環境の中に、アウトドアに最適なフィールドに恵まれている西条で、子どもたちが川・海・山を本気で楽しめるように、学びと体験活動を通じたサポートの拡充を目指す。

今後の目標・課題

・市内すべての小中学校での水辺の安全教育の実施 ・指導者の養成

12. 長崎県全域一①

「～子どもたちのためのプロジェクト～2022年夏 ライフジャケットプロジェクト」 <https://www.nbc-radio.jp/radio/2022-lifejacket/>
NBCラジオ・フラコミュニケーションズ株式会社
認定NPO法人Love&Safetyおおむら



ポスター配布

協賛各社、長崎県内各小学校
約183校、大村市内病院、
海上保安部各所



子ども用ライフジャケット寄贈

県内「海の駅」ほか、地元漁協をはじめ
マリン関連施設など18か所で活用されている。

大村市主催「大村湾ウォッチング」



水遊びの前に、海上保安部によるライフジャケットや海の事故についての講話

長崎海上保安部主催「海の安全教室」



2020年「子どもたちのためのプロジェクト」が発足。
報道機関、NPO団体、交通機関、
保育・教育機関、病院、
地域企業、海上保安部等、多
機関・多職種連携の取組事例。

12. 長崎県全域一②

「大村市子ども安全管理士養成講座」

保育施設でのプール活動安全に関する動画配信



<https://youtu.be/LAYIBQk5JJY>

保育園のプールでの溺れ事故を想定した心肺蘇生法（CPR）のビデオを作成しました。これは、2017年に作成したものに、最新のガイドライン（2020）を反映しています。ポイントは、子どもの溺れ事故、手順は人工呼吸を優先、ただし救助者が人工呼吸を行う意思と技術があれば。さらに感染予防も大事なので、感染防護具を常にそばに。そして、子どもの健康状態をよく把握しておくことやCPRの練習を日頃から行っておく事が大事です。夏の水辺の遊びで子どもの命を落とさないように、園の先生方だけでなく、皆様もぜひこのビデオを参考に、CPRを練習してください。

認定NPO法人Love&Safetyおおむら

卒業生の活躍

私は、2020年度に皆様と同じようにLove&Safetyおおむらの出口先生の講習を受講させて頂き、大村市様の方から子ども安全管理士に認定させて頂き、現在、大村市子ども安全管理士協会にて理事を仰せつかっております。

私は、元々、警察官でしたが、早期退職し、現在の小中学校では、子どもたちの安全面での教育のお手伝いをしたり、児童募集で訪問する幼稚園、保育園の先生方の御相談を受けて、事故予防、安全管理の相談、防犯講習等を行っております。

私の安全管理士としての一例をお話させて頂きます。

夏休みに、本校敷地内にある学童クラブにおいて、小学生低学年を対象として、日本子ども安全学会でご一緒させて頂いた日本ライフセービング協会副理事長の松本様から、遠隔で「水辺での安全」「ライフジャケットの着用方法」をご講義頂き、Love&Safetyおおむら様からご協力頂き、ライフジャケットを借用して、着用方法についても実践を行いました。

その翌日に、実際に海に子どもたちを連れていき、ライフジャケットの着用の仕方、着用しての浮き方や安全な遊び方を実践しました。



ライフジャケットの着用方法を学び、子どもたちが実践している様子



大村市子どもの安全管理講座は、2017年4月、大村市内の保育士、幼稚園教諭、看護師、支援員などを対象に、大村市とLove&Safetyおおむらの協働事業としてスタート。2020年からオンライン講座を実施。現在では、長崎県内全域をはじめ、全国各地から受講可能になり、大村市の市長認定による子ども安全管理士は、第1期～第5期まで160名。第6期は約70名が受講中。講座では、水辺の安全と心肺蘇生法の実習後、受講生の施設での実践レポート提出も、認定基準となっている。2019年に発足した「大村市子ども安全管理士協会」では、子どものライフジャケットの寄付やレンタル事業など、県内の水難事故防止に協力している。

13

スポーツ庁 水辺の安全教育モデル事業の状況

- ①香川県教育委員会
- ②日本ライフセービング協会

13. スポーツ庁 水辺の安全教育モデル事業の状況① 香川県教育委員会

スポーツ庁「令和の日本型学校体育構築支援事業－学校における水難事故防止対策強化－」モデル事業

水難事故防止につながる取組みとして、ライフジャケットの無料貸出を行い、ライフジャケットの必要性や使用方法を体験的に学ぶことができる機会を確保するとともに、ライフジャケットや着衣泳の指導者の派遣を行う。また、ライフジャケットの意義や重要性を実感するライフジャケット親子体験会を行うとともに、体育・保健体育科教員への安全確保につながる運動の研修を行い、安全教育並びに水泳授業の充実を図る。



2022年度は、高松海上保安部、香川大学、香川県B&G財団連絡協議会と連携し、講師派遣を実施。自己保全のための学習の指導内容や指導方法等の工夫について実践研究を県内の小学校で実施（研究推進校：11校）。「ライフジャケット親子体験教室」、研修会「子どもがときめく授業づくり『安全確保につながる運動』」の実施、「ライフジャケット推進事業研究推進委員会」を発足させた。ライフジャケットの無料貸出は、県内全17市町で可能な状況に。水辺の安全教育を推進し、水難事故を防ぐためのインフラ整備を進めていく。

香川県教育委員会「学校における水難事故防止対策強化事業」

https://www.pref.kagawa.lg.jp/kenkyoui/hokentaiiku/gakko/reiwa_nihongata/suinanjikobousi.html



13. スポーツ庁 水辺の安全教育モデル事業の状況② 日本ライフセービング協会

スポーツ庁「令和の日本型学校体育構築支援事業－学校における水難事故防止対策強化－」モデル事業



ウォーターセーフティ教育の実践研究

1. 『e-Lifesaving×水泳実技』
2. 水泳実技のない学校において
3. 特別支援学校・養護学校において
4. ライフセービングクラブとの指導連携

児童・生徒が水辺における自己保全のための対処法（着衣のまま落水した時の対処法、ライフジャケットの活用の仕方）を習得する必要性を自ら実感し、主体的に学び繋げることを目指し、日本ライフセービング協会が児童生徒に実践してきたウォーターセーフティプログラムをもとに、自己保全のための学習内容や、指導方法の工夫、有効な教育連携について研究を進めた。



プール学習



e-lifesavingを活用した学習

プールでの実技学習では、ライフジャケットを着用することで、水が苦手だった子どもたちが授業を楽しんでいる姿が見られた。特別支援学校では、子どもたちの活動の領域が広がった。水難事故防止という目的と共に、水に親しむことへの学びと体験は、学校水泳の授業で重要な位置づけといえる。将来、全学年の生徒へ、成長に合ったウォーターセーフティプログラムを実施できるようになることが望ましい。

体験活動の前後に、e-lifesavingを活用した教室での学習で教育効果が高い結果が示された。プールのない学校でも、海、川、プールの安全を教室で学ぶことができる。この教材は、誰もが指導できるように設計されていて、子どもたち自身で繰り返し学習することができる。

14

子どもの水辺の活動と安全教育の未来

大野美喜子先生

国立研究開発法人 産業技術総合研究所 人工知能研究センター 研究員
認定NPO法人SafeKidsJapan 理事

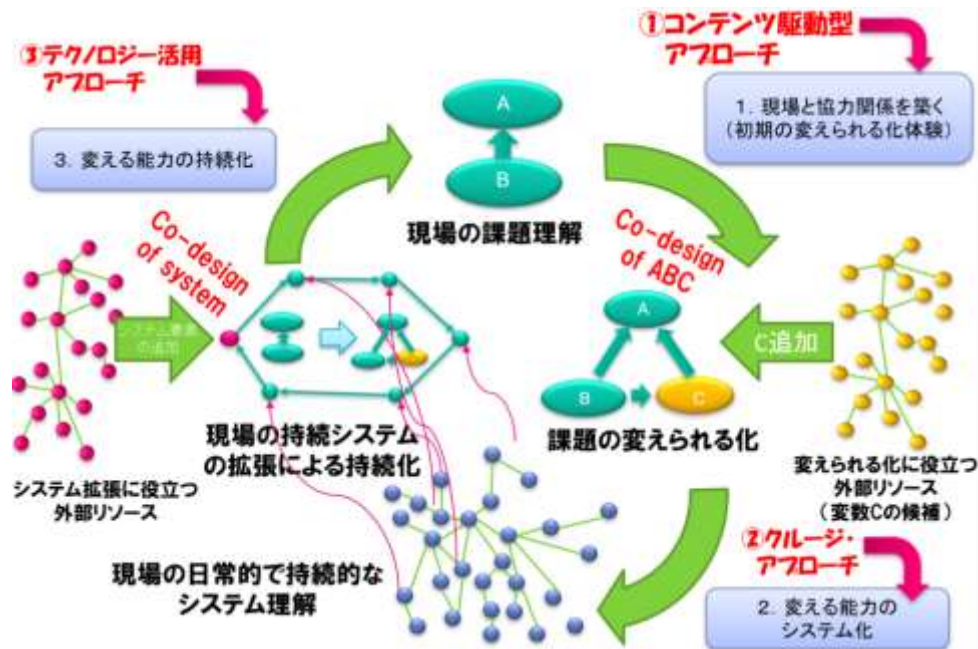
出口貴美子先生

キッズ&ファミリークリニック 出口小児科医院 院長
認定NPO法人Love&Safety おおむら 代表理事

森重裕二先生

ライジャケサンタ「子どもたちにライジャケを！」 代表

西条市民活動団体Love&Safety さいじょう



(図1) 「変えられないもの」を変え化するフレームワーク

Oono, M., Nishida, Y., Kitamura, K., Kanazaki, A. and Yamanaka, T. "Change the Changeable" Framework for Implementation Research in Health. In Proceedings of the 10th International Conference on Computer Supported Education (CSEDU 2018) - Volume 2, pages 361-368 ISBN: 978-989-758-291-2

図1) 水辺の活動に限らず、子どもの傷害予防・安全教育を実施しようとする場合、まず問題になるのは「誰が・いつ・どうやって」実施するのかです。一度、実施できたとしても、その後は、プログラムの継続や拡大という問題に直面します。これらの問題解決に向けて、産業技術総合研究所では「変えられないもの」を変え化するフレームワークを提案してきました(図1)。

学校現場で安全授業を実施するために必要な3つのステップ

(1.現場と協力関係を築く 2.変える能力のシステム化 3. 変える能力の持続化)において、現在、水辺の活動と安全教育の領域では、着衣泳やライフジャケット教育の実践を通して第1ステップが展開されています。

今後、第2ステップ、第3ステップに進むためには、次の3つが必要だと考えます。

提言① 水辺の安全を扱える教科の整理

「クルージ」とは、コンピュータ用語で「そこにあるものを使って課題を解決する」という意味があります。学校現場ですでに取り組んでいる学校カリキュラムの中に安全授業を埋め込むことができれば、現場も動きやすく、活動を実践しやすくなります。そのためには、どの教科のどの単元で水辺の安全を扱う機会があるのかを明確にすることが必要です。例えば、小学5年生であれば「体育科保健領域」の「けがの防止」という単元で安全を扱うことができます。

提言② できない理由に陥らない

学校との連携を始めたり、連携を強化する時、できない理由はたくさんあります。しかし、できない理由も丁寧に紐解けば、その中で「変えられるもの」が見え、できる方法を見つける糸口になるはずです。

提言③ SNS等を活用した生活者巻き込み型教育への展開

近年、子どもも大人もSNSで情報を取得したり、自らの情報を発信する時代になってきています。水辺の安全に関しても、SNSを通じて生活者に安全情報を届ける仕組みを作っていけるとよいと思います。実際、東京都でも、そのような取り組みの展開 (safekidsninja.com)が始まっています。

子ども達への学びの機会を



地球温暖化や環境汚染が急速に進む中、「水」について学び、考え、アクションを起こす必要がある今、将来を担う子ども達にその機会がどれくらい与えられているのでしょうか？

特にこの数年はCOVID19感染症に翻弄され、SDGsを包括的に教科書から学ぶことはあっても屋外活動の制限により「水」について体験として学ぶ機会が減ってしまいました。生きて行く上で欠かせない「水」が、時に命を奪う存在になる事を知らないまま惨事が繰り返されています。

この報告書には、各地で行われている素晴らしい実践が紹介されています。これを時系列で追ってみると、さまざまな分野の「水」の専門家達が子ども達への愛溢れる想いを胸に、学びの機会を作るために、国や行政を動かし、メディアの協力も得て、多面的な水難事故予防教育が、学校教育や一般市民に広がってきている様子がわかります。

何より学びの場にいる子ども達が、直接「水」に触れ、自らの選択で命を守る方法を知り、ライフジャケットを着て水に浮く体験に感動している様子が読み取れ、これこそが「水」と命を結びつける瞬間であり、次世代に受け継がれる貴重な学びの体験となると感じました。

今後は、水辺ではライフジャケットが当たり前にある社会を目指しつつ、地球の環境悪化を防ぐためのアクションにも繋げてほしいと思います。

思いはただ1つ…子どもたちの命を守ること。



全国各地のみなさんが取り組んでおられることをまとめていただいたこの報告書。ここに掲載されている活動は、それぞれの場所で熱い思いのある方々が心意気でがんばってくださっているもの。そのみなさんが続けてくださっている活動のおかげで、全国各地のみんなの思いがつながり、間違いなく大きなうねりを作りつつあることを感じています。

ここで紹介されている活動のように、子どもたちが水辺で活動する時、水辺はリスクが高いってことや「ライフジャケット」を着れば安全性が飛躍的に高まるってことについて学んでおくことと、見守る大人が「ライフジャケット」を準備しておくことで間違いなく守ることができる命があります。

どうか、この報告書がたくさんの方に届き、紹介されているみなさんの思いと熱が全国の隅々にまで広がって、水辺の安全教育が当たり前になっていくことを願っています。そして、水辺の子どもたちが当たり前前に安全に遊べる環境が整い、大切な子どもたちの命を守ることができるようになりますように…。

みなさん、これからも一緒にがんばっていきましょう！



西条市は、西日本最高峰石鎚山（標高1982m）を望み、山頂から瀬戸内海までの直線距離約20キロメートルという、大自然に恵まれた街です。石鎚山から流れる加茂川は、市民生活に身近な水域であり、水の都と呼ばれる西条の大切な水源でもあります。

子どもの頃、加茂川が遊び場だった大人はたくさんいますが、時代や環境の変化が激しい現在、今の子どもたちに、正しい知識や遊び方を教えることができる人は、少なくなっていると感じます。子どもの頃から、近くの小さな自然から学び、成長に応じて大きな自然へチャレンジするという機会は、とても重要です。

学校という公平な場で、子どもたちが友達と一緒に体験する教育活動を通じて、水辺の安全や地域の特性を知ること、活動を楽しむために必要な危険を学ぶこと、学びと思い出を共有して大人になること、それは、生きる力を育み、未来を創ることだと思えます。

本調査では、全国各地で、様々な水辺の安全教育活動が実施されている状況を検証し、地域に根差した教育を仕組みにすることの重要性を確認しました。

持続可能な世界をつくろうという動き(SDGs: Sustainable Development Goals)が、様々な場面で広がっている中で、学びと体験活動を通じて、水辺の安全が「常識」になることを希望します。

2022

日本財団
THE NIPPON
FOUNDATION

海と日本 PROJECT



Wear It !

本調査にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

子どもの水難事故、限りなくゼロを目指して。
水辺の安全教育が全国へ広がることを願います。

この活動は海と日本プロジェクトの一環で実施しました。



一般社団法人
吉川慎之介記念基金
Shinnosuke Memorial Foundation